

教育・保育における食育活動の現状と課題

斎藤祐子¹・奥山優佳²

I. はじめに

第4次食育推進基本計画（2021）¹⁾では食育の取り組み方針について、「我が国の未来を担う子どもへの食育の推進は、健全な心身と豊かな人間性を育んでいく基礎をなすものであり、子どもの成長、発達に合わせた切れ目のない推進が重要である」としている。幼稚園、認定こども園、保育所（以下、教育・保育施設）には、子どもへの食育を進めていく場として大きな役割を担うことが求められている。

幼稚園教育要領（2018）²⁾では食育について、領域「健康」において「先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ」ことがねらいを達成するために指導する内容としており、幼稚園における食育の充実を図っている。また、保育所保育指針（2018）³⁾および幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2018）⁴⁾では食育の推進について明記され、保育所における食育は、健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うことを目標として取り組むべきとしており、さまざまな食育活動が展開されている。

瀬浦ら（2021）⁵⁾、および辻村ら（2015）⁶⁾によると、教育・保育施設における食育活動の内容としては「調理体験」「食育教室（手作り媒体等を使用した食育）」「栽培活動」「給食を活用した食育」「食事のマナー」などが多く取り組まれており、各施設の設備や人員等の現状に合わせて展開していることがうかがえる。

幼稚園教育要領解説（2018）⁷⁾では、食育を通じた望ましい食習慣の形成について、「地域や保護者の協力を得ながら食べることに関わる体験をすることが、幼児なりに食べ物を大切にする気持ちや、用意してくれる人々への感謝の気持ちが自然に芽生え、食の大切さに気付いていくことにつながる」としており、地域や家庭との連携が大切であるとしている。また、保育所保育指針（2018）³⁾および幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2018）⁴⁾では、保護者に対する支援を重視しており、保育所等が保護者と子どもの育ちを共有し、食育を進める役割を担うことが求められている。

¹ 東北文教大学短期大学部 「I, II, III, IV, V」を執筆

² 東北文教大学短期大学部 「I, IV, V, VI」を執筆

さらに、保育所保育指針解説（2018）⁸⁾においては「食育基本法を踏まえ、乳幼児における望ましい食に関する習慣の定着および食を通じた人間性の形成や家族関係づくりによる心身の健全育成を図るため、保育所においても、食に関する取り組みを積極的に進めていくことが求められる」とあり、乳幼児の健全育成の1つとしての家族関係づくりに食育が一翼を担っているということが伺える。斎藤ら（2022）⁹⁾は、山形県の保育施設1か所の食育活動の実践やアンケート調査より、食育がより日常的な実践となるように、保護者へ食育のねらいを明確に打ち出して伝えていくことや、保育現場での食育が、子育て支援の更なる展開につながることに留意しながら食育活動を実践することが重要であることを示唆した。

そこで、本研究では、山形県内の複数の教育・保育施設における食育活動実践の現状について、園内外との連携を視点にしながら把握し、食育活動をすすめる上での今後の課題を見出すことを目的とする。

II. 研究方法

教育・保育施設における食育活動への職員の意識を調査し、その結果から食育活動の現状と課題を明らかにするために、教育・保育施設の職員を対象にアンケート調査を行った。

1. 対象

2022年9月に山形県内の幼稚園（1園）・認定こども園（3園）・保育所（1園）の計5園の職員に対してアンケートを実施した。アンケートの協力を得られた111名を分析対象とした。

2. データ収集方法

アンケート用紙を配布し、記入を依頼した。調査目的を文書に記載し同意が得られた対象者から、後日アンケートを回収した。

3. 調査内容・方法

①基本属性、②食育活動を通した子どもの食習慣と生活習慣、③食育を進める上で必要な園内の連携、④食育を進める上で連携が必要な機関、⑤食育のねらい、⑥特に力を入れている食育活動、⑦食育活動における地域との関わりや協力、⑧食育の課題

4. 分析方法

調査内容について比較検討した。調査内容①～④・⑧の選択項目については単純集計、調査内容⑤～⑦の自由記述については計量テキスト分析にKH Coder 3. Beta. 0 3i（樋口 2020）¹⁰⁾を用いて、抽出された語の頻出語と共起ネットワークの分析を行った。

5. 倫理的配慮

研究協力者には、研究の目的と方法についての説明とともに、研究への参加は自由意思であること、研究に参加しなくても不利益な取り扱いは受けないこと、収集したデータは集団のデータとして取り扱うこと、結果を関連教育機関に公表すること、などについて書面で説明を行った。プライバシーの保護のためにアンケートは無記名自記式とし、研究協力に同意が得られた場合のみ質問紙に記入し返送を依頼

した。

本研究は、東北文教大学・東北文教大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号 T B 2022-006）。

Ⅲ．結果

1．選択項目の分析

（1）基本属性

有効回収数111件の属性は、職種別にみると、「教育・保育職（3歳以上児クラス担当）」（34.2%）、が最も多く、次いで「教育・保育職（0歳児・1歳児クラス担当）」と「給食職員」（16.2%）であった。年代別にみると、「30代」（31.5%）が最も多く、次いで「20代」（30.6%）であり、以下、「40代」（18.9%）、「50代」「60代以上」（8.1%）であった（表1）。

表1 基本属性（全体， n = 111）

項目		人	%
職種	教育・保育職(0歳児・1歳児クラス担当)	18	16.2
	教育・保育職(2歳児クラス担当)	13	11.7
	教育・保育職(3歳以上児クラス担当)	38	34.2
	クラス担当外	14	12.6
	給食職員	18	16.2
	その他の職種	7	6.3
	無回答	3	2.7
年代	20代	34	30.6
	30代	35	31.5
	40代	21	18.9
	50代	9	8.1
	60代以上	9	8.1
	無回答	3	2.7

（2）食育活動を通した子どもの食習慣と生活習慣

「当該年度の園における食育活動を通して、子どもの食習慣や生活習慣について思うこと」について、2歳児～5歳児担当の教育・保育職員に回答を求めた。

食習慣については、「①ゆっくりよくかんで食べている」、「②はし・スプーンなどの使い方が身についている」、「③「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをする」、「④食事前の手洗いが身についている」、「⑤自分で食事を食べている」、「⑥食事を食べる量が増える」、「⑦残さず食べる」、「⑧楽しく食事をする」、「⑨苦手なものでもがんばって食べている」、「⑩食事への意欲がある」、「⑪落ち着いて食べている」、「⑫食事や食べ物の話題が増えている」、「⑬給食の準備や片付けをする」、「⑭行事食があることを理解している」の14項目に対して、それぞれ「思う」「どちらかといえば思う」「あまり思わない」「思わない」で回答を求めた。

その結果、「思う」と「どちらかといえば思う」が占める割合が高い順に、「自分で食事を食べている」（96.6%）、「食事前の手洗いが身についている」（93.1%）、「「い

たきます」「ごちそうさま」のあいさつをする」(91.4%)、「楽しく食事をする」(89.7%)、「落ち着いて食べている」(87.9%)、「食事への意欲がある」(86.2%)、「食事を食べる量が増える」(86.2%)であった(図1)。

生活習慣については、「①遊びが豊かになっている」、「②楽しく活動する回数が増えている」、「③自然に興味を持つようになってきている」、「④準備や片付けができるようになってきている」、「⑤自分の気持ちを相手に伝えられるようになってきている」、「⑥異年齢児との関わりが持てるようになってきている」、「⑦自ら考えて活動するようになってきている」、「⑧周りの人と協力して活動するようになってきている」の8項目に対して、それぞれ「思う」「どちらかといえば思う」「あまり思わない」「思わない」で回答を求めた。

その結果、「思う」と「どちらかといえば思う」が占める割合が高い順に、「自然に興味を持つようになってきている」(98.3%)、「楽しく活動する回数が増えている」(98.3%)、「遊びが豊かになっている」(96.6%)、「周りの人と協力して活動するようになってきている」(87.9%)であった(図2)。

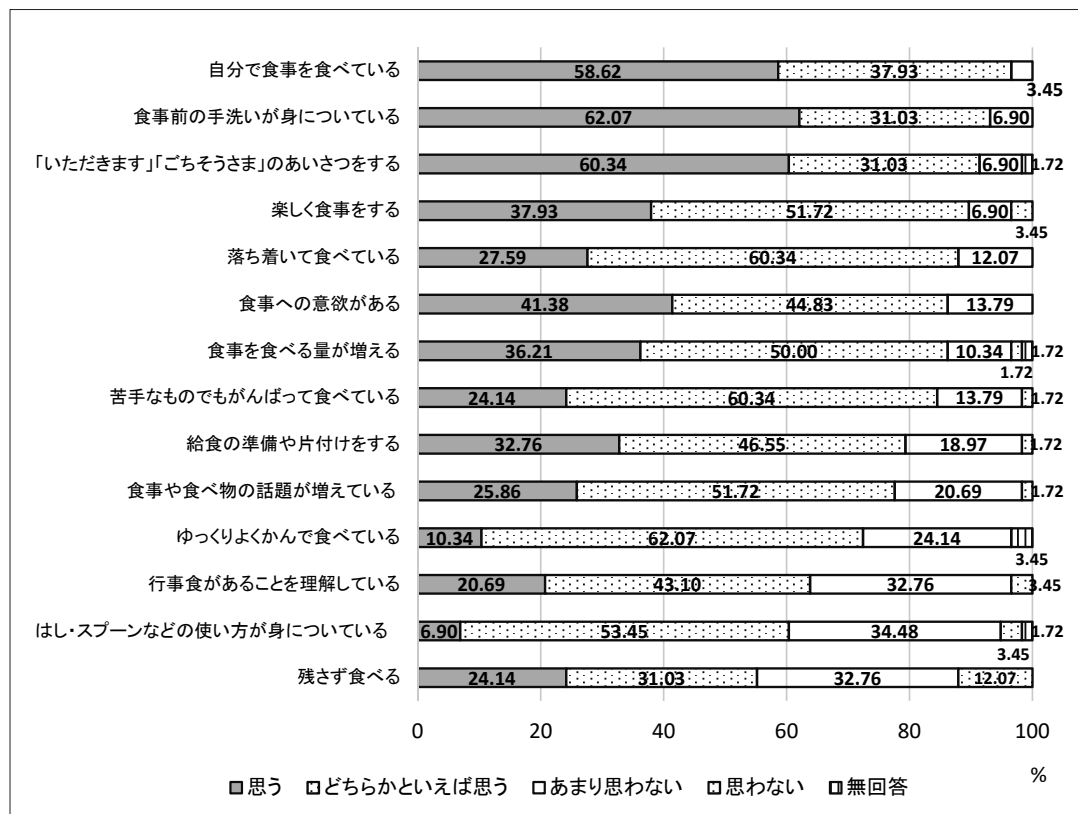


図1 食育活動を通した子どもの食習慣(2～5歳児)(n=58)

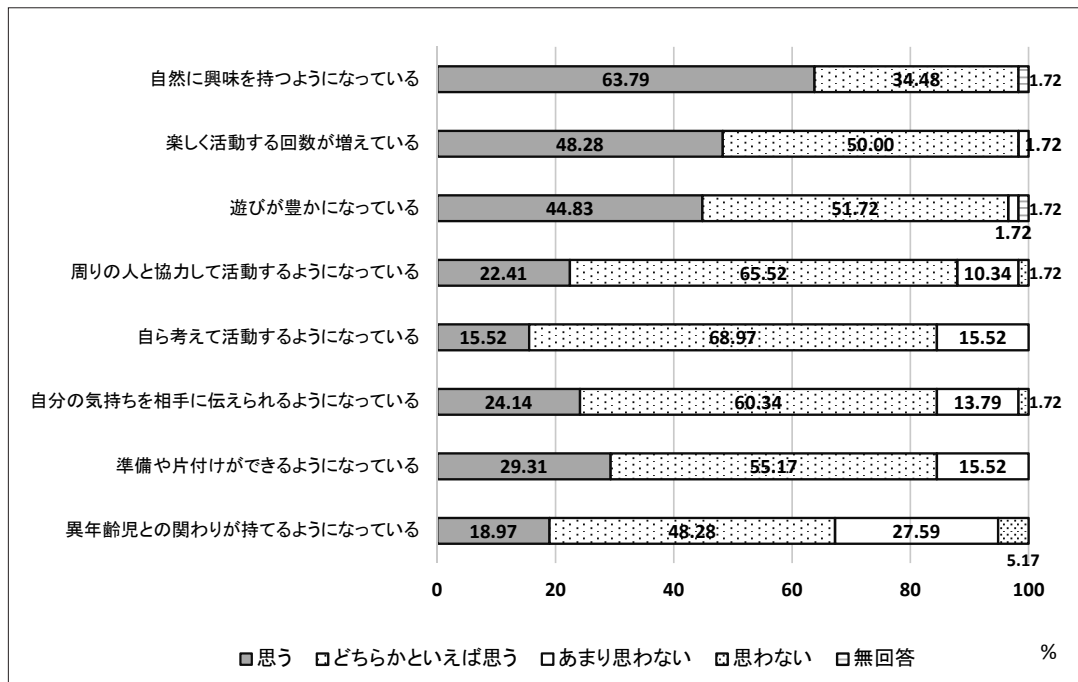


図2 食育活動を通した子どもの生活習慣（2～5歳児）（n=58）

（3）食育を進める上で必要な園内の連携

「食育を進めるにあたり、園内で必要な連携にはどのような職種との連携があるか」の複数回答で最も多かったのが、「給食職員」、次いで「管理職」、以下「業務職員」「事務職員」であった（図3）。

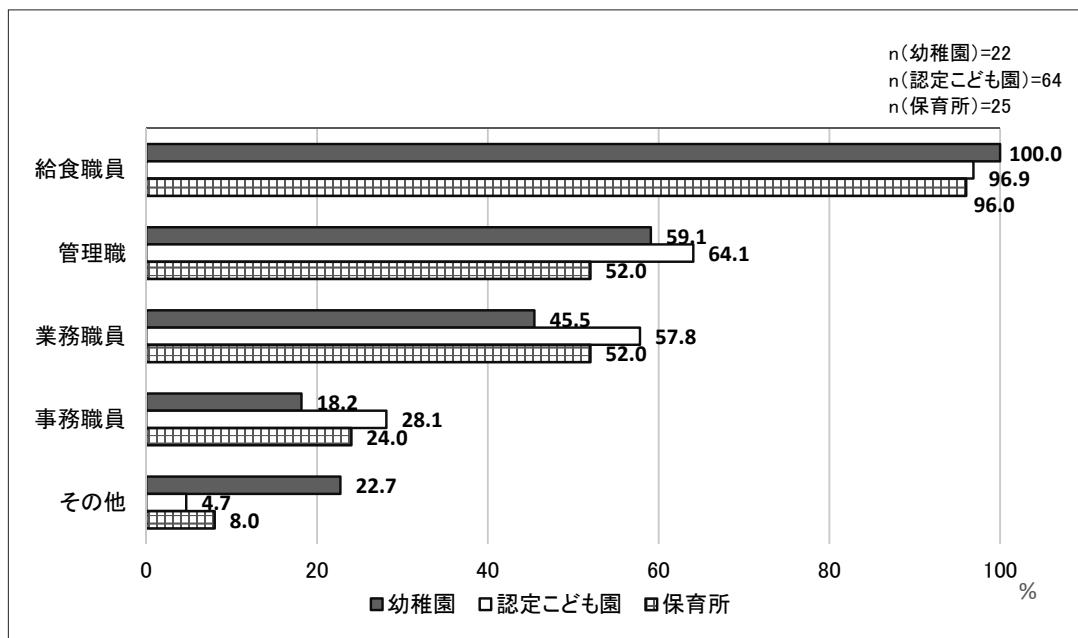


図3 園内で必要な連携（複数回答，園種別）

(4) 食育を進める上で連携が必要な機関

「食育を進める上で連携が必要な機関」の複数回答で最も多かったのが、「市町村の関係機関」、次いで「保護者会・父母の会」、以下「小中学校」「保健所・保健センター」であった(図4)。

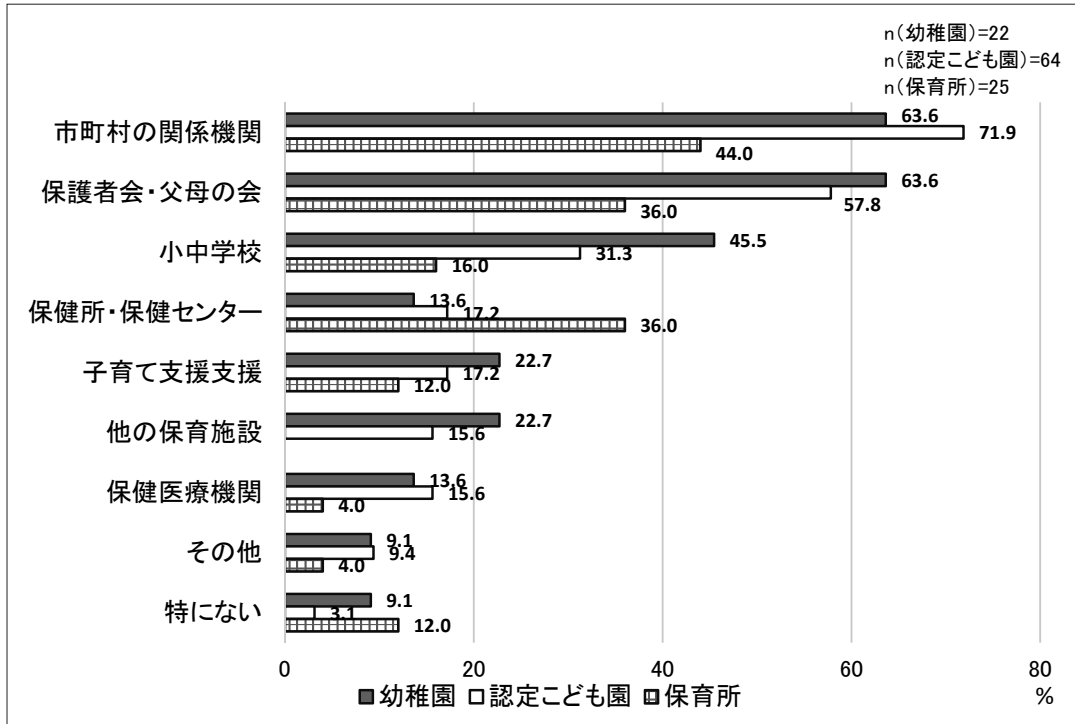


図4 連携が必要な機関(複数回答, 園種別)

(5) 食育活動における地域との関わりや協力

「食育を進めていく中で、地域との関わりや協力があるか」の回答で最も多かったのが「ある」(69.4%)、次いで「ない」(26.1%)であった。園種別では幼稚園では「ない」が100%、認定こども園では「ある」が82.8%、保育所では「ある」が96.0%であった(図5)。

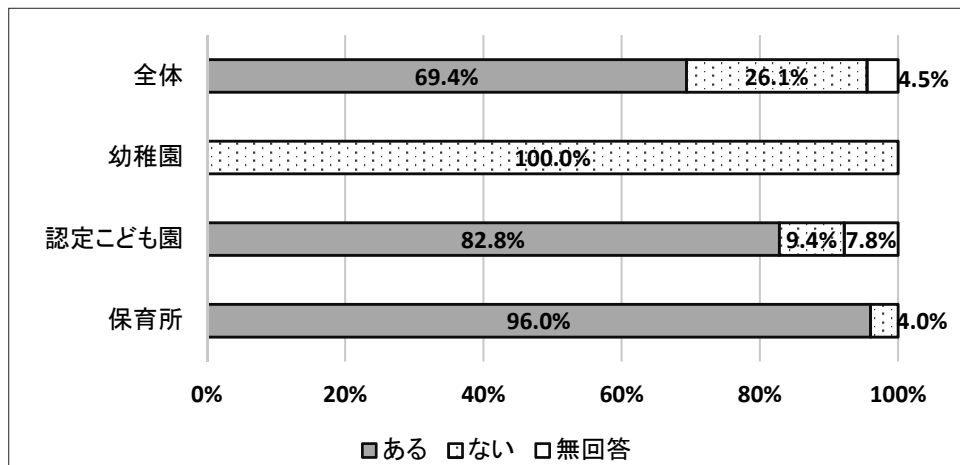


図5 食育活動における地域との関わりや協力(全体, n=111)

（６）食育の課題

「現在食育を行っている上での課題はあるか」の全体の回答で最も多かったのが「ある」（48.6%）、次いで「ない」（46.8%）であった。職種別では「ある」の回答が最も多かったのが「その他職種」（69.2%）、次いで「クラス担当外」（64.3%）、以下「2歳児」（57.1%）であった（図6）。

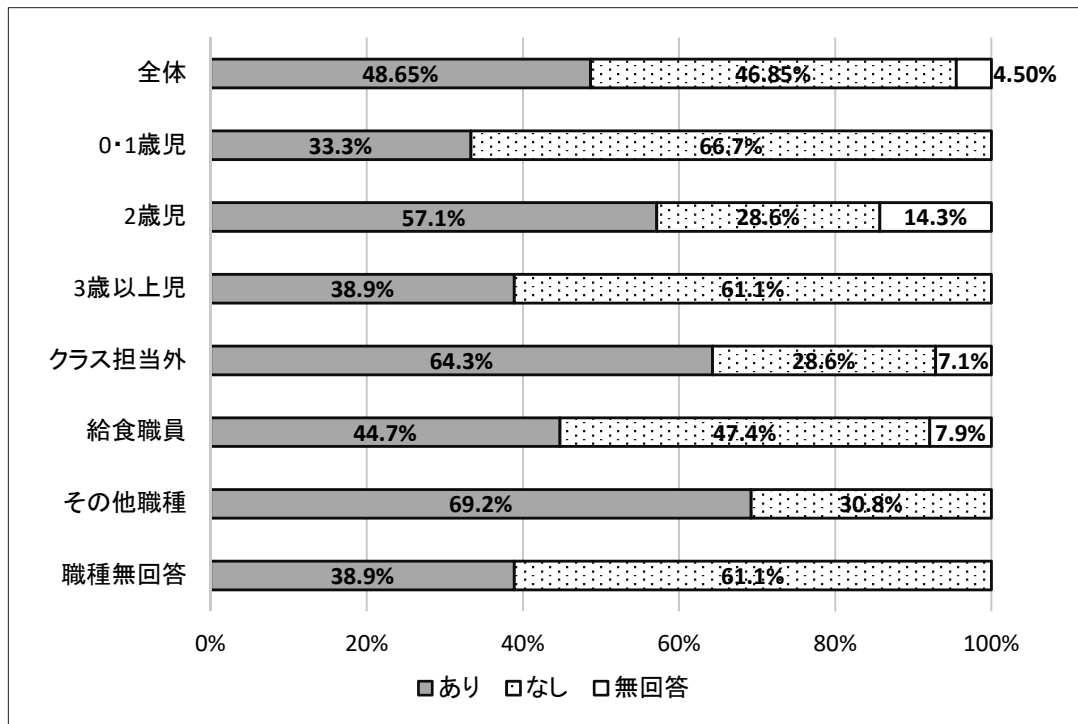


図6 食育を行う上での課題（職種別）（全体，n = 111）

2. テキストマイニングによる自由記述の分析

質問項目⑤食育のねらい、⑥特に力を入れている食育活動、⑦食育活動における地域との関わりや協力、⑧食育の課題については自由記述回答してもらった。回答による出現文章から語の総抽出を行い、テキストマイニングによる分析を行った。抽出後の出現頻度と抽出語同士の関連性について分析した。4回以上出現した語を抽出した。

（１）食育のねらい

「今年度の食育を実践する際のねらい」について、4回以上抽出された語を表2に示した。多い順に「食べる」「食事」「持つ」「楽しい」「自分」「食べ物」「野菜」「味わう」であった。

共起ネットワーク分析結果を図7に示した。図7では6つのサブグラフが示された。頻出回数の多い抽出語を含む③のサブグラフでは、「食事」「楽しい」「味わう」「マナー」などが共起している。記述例を見ると「食事のマナーを身に付け、みんなと一緒に楽しく食事をする」「友だちと共に食事を進め、一緒に食べる楽しさを味わう」などとあった。また、⑥のサブグラフでは「自分」「野菜」「収穫」などが共起しており、「自分たちで野菜を育て、収穫する喜びを味わい、おいしく食べる」「自分たちで野菜を育てることで、育てる楽しさや大変さ、達成感を感じる」などと記述されていた。

表2 食育のねらいについての自由記述（頻出語の出現回数）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
食べる	55	食材	9	喜ぶ	6
食事	27	友達	9	苦手	6
持つ	26	育てる	8	食	6
楽しい	17	興味	8	調理	6
自分	14	収穫	8	正しい	5
食べ物	14	触れる	8	雰囲気	5
野菜	13	知る	8	意識	4
味わう	12	色々	7	子ども	4
マナー	10	箸	7	食器	4
楽しむ	10	料理	7	茶碗	4
一緒に	9	感じる	6	保育	4
関心	9	喜び	6		

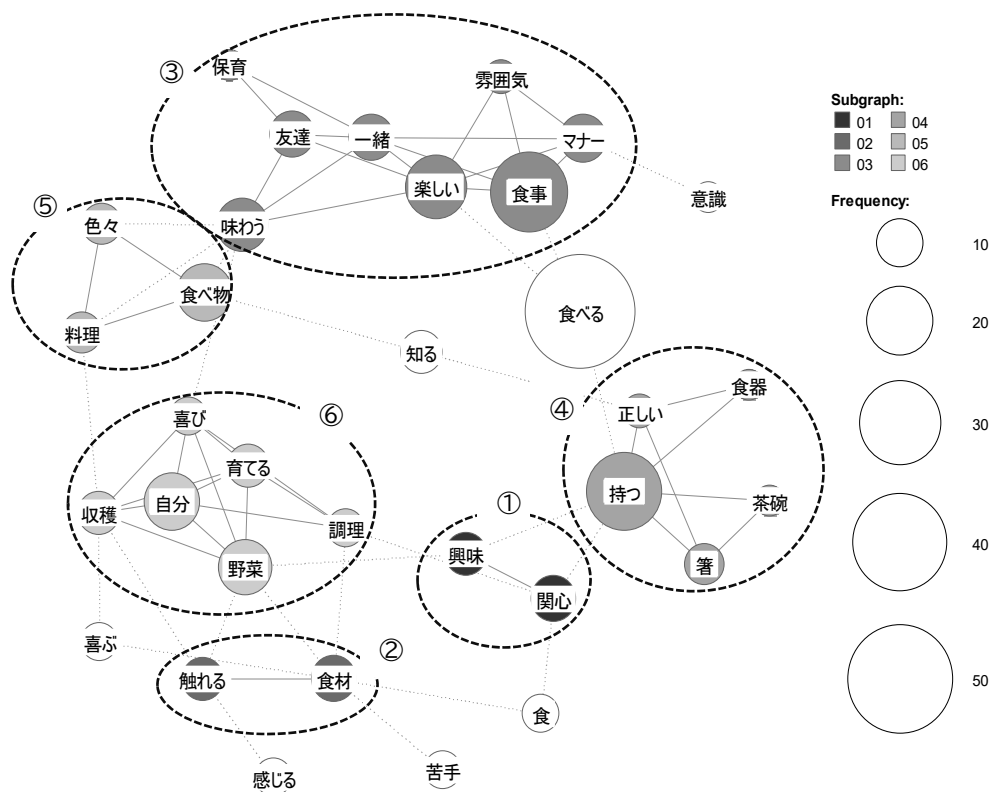


図7 食育のねらいの共起ネットワーク

(2) 特に力を入れている食育活動

「今年度の食育活動で、特に力を入れている活動」について、4回以上抽出された語を表3に示した。多い順に「食べる」「野菜」「畑」「持つ」「興味」「食事」「楽しい」「食材」であった。

共起ネットワーク分析結果を図8に示した。抽出の際には「食育」の語を一単語として抽出できるように設定した。図8では6つのサブグラフが示された。頻出回数の多い抽出語を含む②のサブグラフでは、「食べる」「食事」「楽しい」が共起している。記述例を見ると「給食を楽しい雰囲気の中で食べる」「友達と一緒に食べ、色々な食べ物を食べる楽しさを味わう」などとあった。また、①のサブグラフでは「野菜」「畑」

「持つ」「興味」が共起しており、「野菜に興味をもち、さらに、食べる意欲につなげる」「園の畑で栽培している野菜などを見たり触れたりし興味を持つ」などと記述されていた。

表3 特に力を入れている食育活動についての自由記述（頻出語の出現回数）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
食べる	61	作る	11	苦手	6
野菜	41	調理	11	栽培	6
畑	28	クッキング	10	食品	6
持つ	26	食	10	体	6
興味	25	味わう	10	大切	6
食事	24	見る	9	様々	6
楽しい	23	雰囲気	9	気持ち	5
食材	23	友達	9	見学	5
活動	19	意欲	8	マナー	4
食べ物	18	一緒	8	栄養	4
給食	17	栄養士	8	感謝	4
育てる	16	関心	8	経験	4
知る	16	触れる	8	健康	4
楽しむ	14	感じる	7	作物	4
自分	14	使う	7	伝える	4
収穫	14	食育	7	赤	4
子ども	13	入る	7	黄	4
園	12	保育	7	緑	4

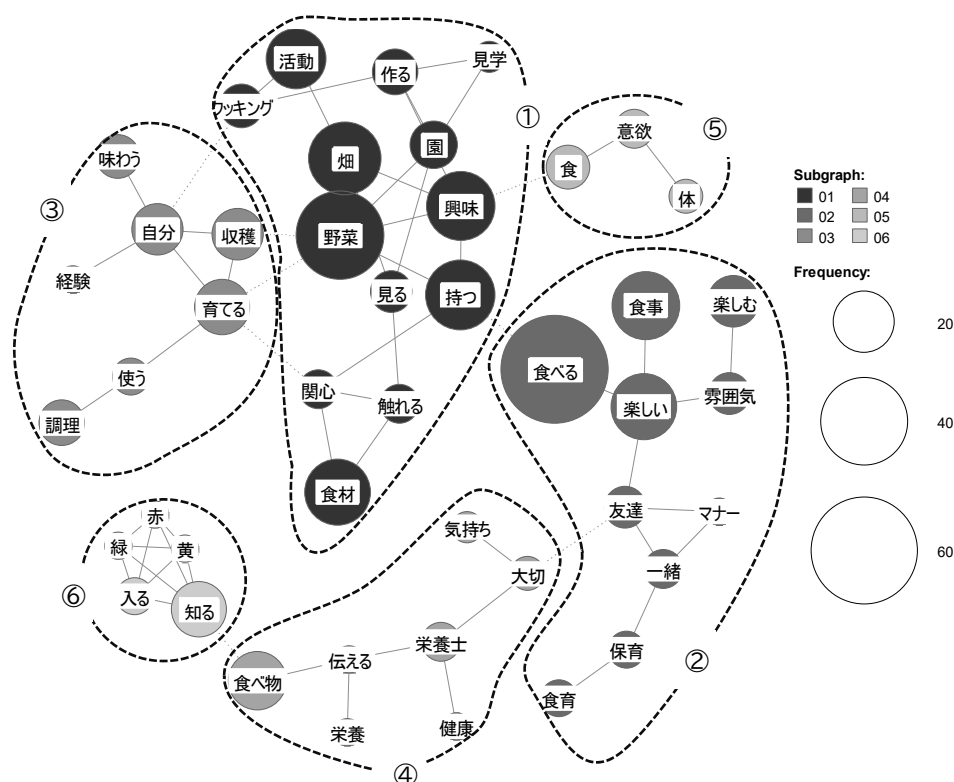


図8 特に力を入れている食育活動の共起ネットワーク

(3) 食育活動における地域との関わりや協力

「食育活動における地域との関わりや協力の具体的内容」について、4回以上抽出された語を表4に示した。多い順に「畑」「先生」「収穫」「野菜」「パーティー」「地域」「農業」「シルバー」「人材」であった。

具体的内容の自由記述における共起ネットワークを図9に示した。図9では10のサブグラフが示された。頻出回数の多い抽出語を含む⑨のサブグラフでは「畑」「先生」が共起している。記述例を見ると「畑の先生が来て、畑の野菜を育てる手伝いをしてくれる」「畑の先生が子ども達と野菜作り・米作りなどを行なっている」などとあった。また、①のサブグラフでは「パーティー」「農業」「さつま芋」「シチュー」が共起しており、「カレーパーティーやシチューパーティーに農業委員会の方を招待している」「市農業士会、農業委員会とのじゃが芋・さつま芋収穫体験とカレーパーティー・シチューパーティー（感謝の会）の実施」などと記述されていた。

表4 地域との関わりや協力についての自由記述（頻出語の出現回数）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
畑	59	カレー	9	行く	5
先生	29	給食	9	散歩	5
収穫	20	協力	9	産物	5
野菜	19	購入	9	使う	5
パーティー	18	体験	9	地場	5
地域	16	JA	8	年長	5
農業	15	センター	8	育てる	4
シルバー	13	見る	7	芋	4
人材	13	食材	7	行う	4
栽培	12	教える	6	作る	4
さつま芋	11	作物	6	持つ	4
一緒	11	子ども	6	借りる	4
果物	11	招待	6	食べる	4
シチュー	10	地元	6	町	4
委員	10	じゃが芋	5	提供	4
活動	10	感謝	5	農家	4
植える	10	近く	5	来る	4
		交流	5	里芋	4

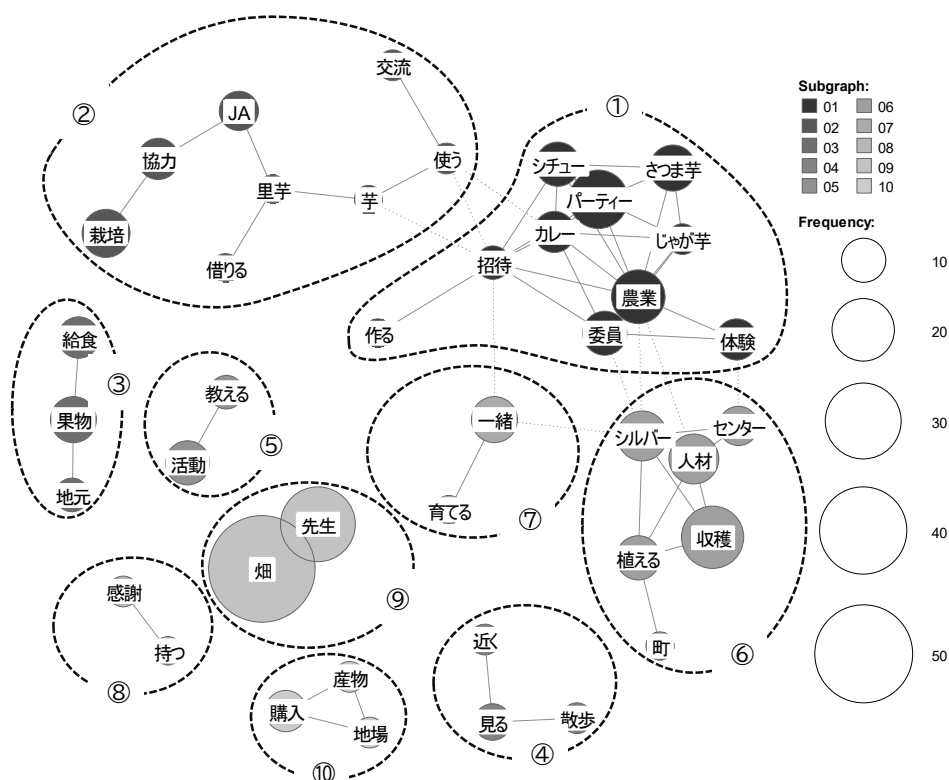


図9 地域との関わりや協力についての共起ネットワーク

（４）食育の課題

「食育の課題」について、４回以上抽出された語を表５に示した。多い順に「食べる」「子ども」「食事」「家庭」「食育」「多い」「楽しい」であった。

具体的内容の自由記述における共起ネットワークを図１０に示した。抽出の際には「食育」「保護者」「コロナ禍」の語を一単語として抽出できるように設定した。図１０では８つのサブグラフが示された。頻出回数の多い抽出語を含む⑥のサブグラフでは、「食べる」「多い」「難しい」「苦手」「進める」が共起している。記述例を見ると「個人差が大きく、１人で食べ進められる子ども・苦手なものが少ない子どもはすぐに食べ終わるなど時間や意欲の差が大きい」「偏食の子どもに対しての言葉がけや、食事の勧め方が難しい」「苦手なものや食材がある子の家庭との連携」などとあった。①のサブグラフでは「食育」「楽しい」「給食」「活動」などが共起しており、「その時の子ども達に合わせた食育ができるよう、柔軟に取り組む」「園でのみ食育を訴えたり実践するのではなく、家庭でも多様な食材、調理の仕方、味付け等を試してもらいたい」「コロナなどの感染予防をしながらで、給食の時間等楽しい食育活動が通常通りに行えていない（黙食が基本のため）」などと記述されていた。⑧のサブグラフでは「食事」「家庭」「連携」「食材」「保護者」「園」などが共起しており、「苦手なものや食材がある子の家庭との連携」「保護者へもアプローチしていき、家庭との連携をさらに深めていきたい」などと記載されていた。

地域との協力や関わりに関連して、「地域」の語は１回抽出された。記述を見ると「市内で納入業者の協力が少なく、地域の食材を扱うのが難しい（保育所・給食職員）」とあった。教育・保育職員で地域との関わりを課題に挙げていた者はいなかった。

表5 食育の課題についての自由記述（頻出語の出現回数）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
食べる	20	食	7	園	4
子ども	19	食材	7	言葉	4
食事	15	活動	6	考える	4
家庭	13	興味	6	職員	4
食育	12	苦手	6	進める	4
多い	11	保護者	6	大きい	4
楽しい	10	感じる	5	大切	4
コロナ禍	8	偏食	5	伝える	4
給食	8	保育	5	箸	4
子	8	良い	5	必要	4
難しい	8	クッキング	4	黙る	4
連携	8	コロナ	4	料理	4
持つ	7	メニュー	4	咀嚼	4
少し	7	意欲	4		

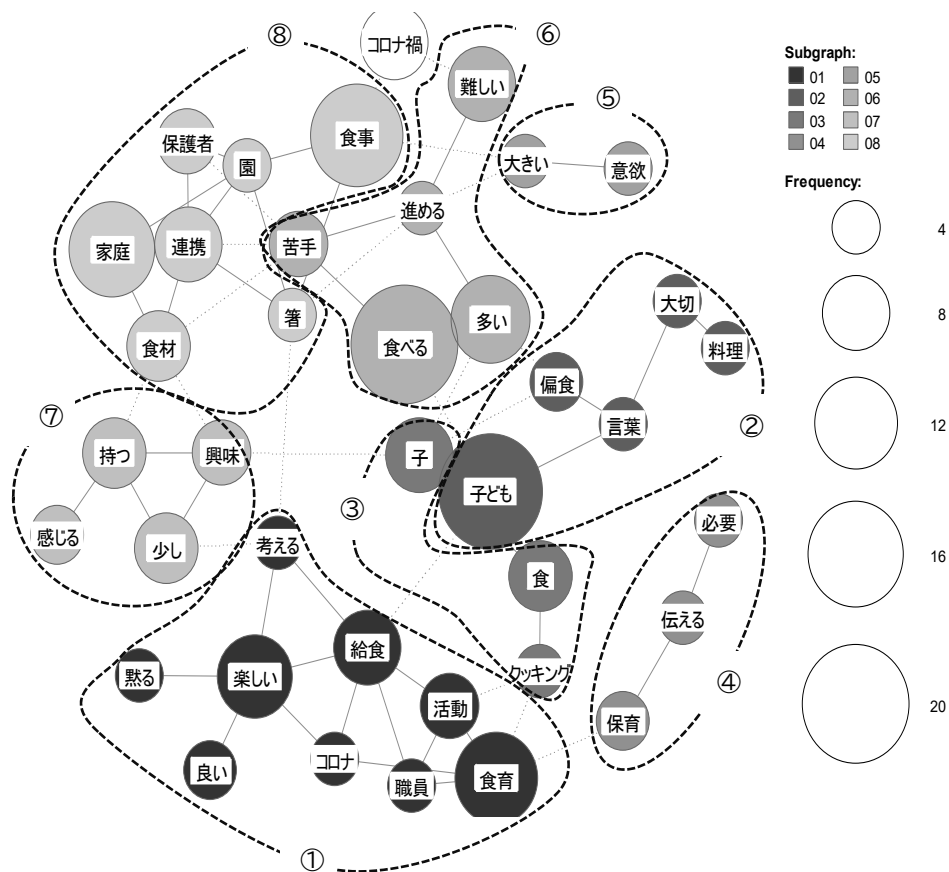


図10 食育の課題についての共起ネットワーク

IV. 考察

食育活動を通した子どもの食習慣で、8割以上が肯定（思う、どちらかといえば思う、の肯定点を合計）した項目は、「自分で食事を食べている」、「食事前の手洗いが身についている」、「『いただきます』『ごちそうさま』のあいさつをする」、「楽しく食事をする」、など8項目であった。肯定率が最も高かった「自分で食事を食べる」ことについては、子どもの成長に伴い身につく可能性もあるが、園で支援に取り組んでいることも一因であることが推察された。また、「楽しく食事をする」ことについて、保育所保育指針³⁾では保育所における食育について、「子どもが毎日の生活と遊びの中で、食にかかわる体験を積み重ね、食べることを楽しみあう子どもに成長していくこと等に留意する」としている。斎藤ら（2022）⁹⁾によると、楽しく食事することは家庭で実践している食育で最も多く、保護者も意識して取り組んでいた。これは「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～（概要）」（2004）¹¹⁾の食育目標にも結びついており、園および保護者が共通して実践していることが明らかとなった。

一方、子どもの生活習慣では「自然に興味を持つようになっている」「楽しく活動する回数が増えている」の肯定率が高く、食育活動において野菜の栽培や畑の見学などを通して自然に興味を持つようになり、園での活動が楽しいものになっていることが伺えた。

食育を進める上で必要な園内の連携では「給食職員」が最も多く、全体で97.3%であった。また、「管理職」の回答も過半数を超えていた（60.4%）。第4次食育推進基本計画（2021）¹⁾では就学前の子どもに対する食育の推進について、「施設長や園長、保育士・幼稚園教諭・保育教諭・栄養士・栄養教諭、調理員等の協力の下に食育の計画を作成し、各施設において創意工夫を行うものとする」としている。食育活動を進める上では給食職員の積極的な参加が必要である。上杉ら（2013）¹²⁾は、「食育活動に栄養士が参加している園では、保育所における食育に関する指針（2004）が示した食育のねらいである食育の5項目のうち、「いのちの育ちと食」および「料理と食」の実施数が多く、給食や料理に関する指導や保護者対象の食育活動等は、栄養士が食育活動に参加している園での実施が多かった」と報告している。食材を教材として使用する内容の活動や栄養指導に関する内容などは、栄養士を含む給食職員がその専門性を活かして、保育士と連携を図りながら食育活動を進めることが重要であると考えられる。さらに園全体で取り組むためには管理職を中心とした組織や体制づくりが必要と考えられる。

食育を進める上で連携が必要な機関の複数回答では多い順に、「市町村の関係機関」（64.0%）、「保護者会・父母の会」（54.1%）であった。市町村の関係機関との連携については、子育て支援課や農林水産課などの行政機関や、地域の食育推進の担い手である食生活改善推進員協議会など、様々な機関との連携の必要性が示唆された。保護者との連携については、食育の課題の自由記述でも記載があり、「家庭と連携して食育を進めていきたいが、忙しい保護者も多く、難しさを感じている」「食事マナーや箸の使い方を保護者と連携をとりながら行っている」など、職員が保護者と連携して食育を進める必要性を感じていた。

食育のねらいについて共起ネットワークのサブグラフからは、「マナーを身に付け、

楽しく食事を味わう」「自分たちで野菜を育て収穫して喜ぶ」「茶碗・食器・箸を正しく持つ」などの内容が読み取れた。食事のマナーや栽培・収穫体験、食具の使い方などを食育のねらいとしていることが伺えた。

特に力を入れている食育活動について、共起ネットワークのサブグラフからは、「友達と一緒に楽しい雰囲気の中で食べ、食事を楽しむ」「畑の活動や見学を通して野菜や食材に興味を持つ」「栄養士が食べ物の栄養や健康の大切さを伝える」「自分達で育て収穫・調理し、味わう経験」などの内容が読み取れた。

食育活動における地域との関わりや協力について、共起ネットワークのサブグラフからは、「畑の先生」「農業委員の方を招待し、じゃが芋やさつま芋でカレーやシチューを作ったパーティー」「シルバー人材センターの方と植えて収穫する」などの内容が読み取れた。今回調査した教育・保育施設の中には、農産物の栽培がさかんな地域であることを活かし、JAやシルバー人材センターと連携し、畑の先生として野菜の栽培を行っている園が複数あった。収穫した野菜を調理したり給食に使用したりすることで、より子どもの身近な体験活動へつなげていけるのではないかと考える。

食育の課題について、共起ネットワークのサブグラフからは、「苦手なものが多い場合、食べ進め方が難しい」「コロナで黙る中で、給食が楽しい活動となるような食育を考える」「食事や食材について、園と家庭・保護者が連携する」「偏食の子どもへの言葉がけ」などの内容が読み取れた。苦手なもの食べ進め方や偏食への対応については園における支援だけでなく、家庭の協力も必要であることから、保護者との連携が必要となってくる。石見ら(2016)¹³⁾は保護者対象の食教育が保護者の意識や家庭に及ぼす影響について、「保護者対象の食教育実施により、保育所で取り組む活動や通信について積極的に意見をしてくださるようになり、保育士との連携や家庭における子どもの育ちの援助につながった」と述べている。給食参観や試食会、食育だよりの配布など園での食育活動が子どもを対象にしたものだけでなく、保護者にも行うことで、保護者の食育に対する意識が高まることが期待される。これらを園の保護者会・父母の会と連携して開催することで組織的な活動ができ、保護者の積極的な関わりが期待できるであろう。

一方で、地域との協力や関わりに関連した課題は、給食職員による地域の食材納入に関しての1件のみで、教育・保育職員で課題として挙げた者はいなかった。地域との関わりや協力が「ない」と全職員が回答した園もあったが、その園では食育の課題には、地域との協力や関わりを誰も挙げていなかった。第4次食育推進基本計画(2021)¹⁾では、食育の推進に当たっての目標の1つとして、地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を継承し、伝えている国民を増やすことを挙げている。また、保育所における食育に関する指針(2004)¹¹⁾が示している食育の5項目の1つである「食と文化」では、地域で培われた食文化を体験し、郷土への関心を持つことをねらいとしている。これらのことから、地域や家庭で受け継がれてきた郷土料理や伝統野菜などに触れ、食べることにより、将来に渡り食文化を継承していくことは重要であり、そのためには地域との協力や関わりが必要であると考えられる。

2020年以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が感染拡大している影響で食育活動への制限が続いている。食育の課題の自由記述における「コロナ禍」と「コロナ」の抽出語の出現回数は合わせて12回あり、新型コロナウイルス感染症対策が最優先で、会話をしながら給食やおやつのおいしさや楽しさを共有することが出来てい

ない現状が伺えた。山形県の新型コロナウイルス感染症対策マニュアル（2022）¹⁴⁾では食事・おやつの際の感染対策として、「会話を控えることが推奨されているが、子どもが皆で食べる楽しさや食への関心を高めることができるよう配慮する」と明記されている。しかしながら、具体的な支援方法についての記載はないため、会話を控えた状態で楽しく食べるにはどのようにしたらよいのか、職員が苦慮している現状が明らかとなった。そのような中、食育活動の自由記述に「毎日、栄養士が放送で食事の内容や栄養について伝えている。それを聞き、食べてみようとする子どもの姿が増えている」と挙げていた職員がいた。放送を使って子どもに直接伝える活動をしており、コロナ禍での食育活動として有効な支援方法であると思われる。その他にも、コロナ禍の現状を踏まえた食育の内容に関する園内外の研修や職員間の情報共有なども必要であると考ええる。

なお、文部科学省は2022年11月に「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」の変更通知¹⁵⁾の中で、「文部科学省が作成する『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル』においては、『会食に当たっては、飛沫を飛ばさないよう、例えば、机を向かい合わせにしない、大声での会話を控えるなどの対応が必要です。』等とし、従前から、必ず『黙食』とすることを求めているところだ。」と述べている。更には、「座席配置の工夫や適切な換気の確保等の措置を講じた上で、給食の時間において、児童生徒等の間で会話を行うことも可能ですので、感染状況も踏まえつつ、地域の実情に応じた取組を御検討いただくよう、よろしくお願い申し上げます。」と述べている。すなわち、飛沫の飛散防止等、適切な感染対策を取れば会話も可能であるとの考え方を改めて示したと言えることから、地域や園の実情に応じながら、園は、給食の時間に会話ができるような食事環境の具体的な対応を再検討する必要に迫られていると言える。

V. 結論

本研究の目的は、山形県内の複数の教育・保育施設における食育活動実践の現状について、園内外との連携を視点にしながら把握し、食育活動をすすめる上での今後の課題を見出すことにあった。

まず、今回の教育・保育施設の職員を対象に実施したアンケート調査から、子どもにとっては、自分で食べるようになっていたり、食事前の手洗いが身についていたり、食事前のあいさつをしていたりなど、食習慣形成において一定の成果があったと感じる教育・保育職員が多い結果となった。また、生活場面では、ほぼ全ての教育・保育職員が、自然に興味を持つようになっていたり、楽しく活動する回数が増えたりしていると感じており、食事場面以外でも子どもの成長を実感していることが分かった。

次に、食育活動の現状については、楽しい雰囲気の中で食事を楽しむことや畑の活動、栄養士による食べ物のお話などが力を入れている活動として取り組んでいた。これらの内容は、保育所における食育に関する指針（2004）¹¹⁾が示した、食育のねらいである食育の5項目「食と健康、食と人間関係、食と文化、命の育ちと食、料理と食」の全てに関連しているものであった。しかし、2020年以降、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、友達や保育者と会話をしながらの楽しい食事が難しくなり、子どもに

として食事が楽しくなるための工夫が課題となっている。特にこれからは、食事中に会話が楽しめるような環境の工夫が必要である。

園内外との連携について、まず園内の連携では給食職員や管理職との連携の必要性が明らかとなった。次に園外との連携では、市町村の関係機関や園の保護者会・父母の会などの機関との連携の必要性が明らかとなった。中でも保護者を対象とした食育活動を園の保護者会・父母の会と連携して実施することは、子どもも含めた家庭の食育につながることを期待できる。また、J Aやシルバー人材センターなど地域との関わりや協力がみられた。農作物に関する専門的知識を持った人的資源や設備を提供してもらうことにより、子どもが継続して栽培活動に参加し、収穫・調理まで経験することができると考えられ、食育によって、園内だけではなく、園外の地域の人々と関わることによる社会性の育成や、地域を大切に、地域を愛する心の育成も期待できる。

以上のことから、新型コロナウイルス感染対策をしながら、食育がより日常的な教育・保育活動となるように、教育・保育職員のみならず給食職員やその他の職員と連携を深めるための工夫をすることや、地域住民や保護者から様々な形で協力を得て取り組んでいくことが、今後の食育活動の課題として挙げられる。

VI. おわりに

未来を担う子どもへの食育の推進は、健全な心身と豊かな人間性を育んでいく基礎をなすものであるため、食育活動は、食事場面に限らず、教育・保育のあらゆる活動と関連付けながら考えていかなければならない。今回のアンケート調査からは、食育の推進のためには、教育・保育職員のみならず、教育・保育施設内の職員の連携と、保護者や地域からの協力が課題として挙げられ、重要であることが明らかとなった。しかしながら、地域との関わりや協力が「ない」と全職員が回答し、なおかつ今後の課題に園外との連携について触れた回答をした職員が誰もいなかった園もあったことから、今後は、教育・保育現場における食育推進の一助となるように、職員の連携を図りながら食育を行っている教育・保育施設や、保護者や地域からの協力を得ながらの食育を行っている教育・保育施設の具体的な実践について調査していきたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました幼稚園・認定こども園・保育所の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省 第4次食育推進基本計画, 2021 <https://www.mhlw.go.jp/content/000770380.pdf> (最終アクセス2022年11月25日)
- 2) 幼稚園教育要領<平成29年告示> 文部科学省, 2018
- 3) 保育所保育指針<平成29年告示> 厚生労働省, 2018
- 4) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領<平成29年告示> 内閣府／文部科学省／厚生労働省, 2018
- 5) 瀬浦崇博, 川邊淳子 (2021): 幼稚園・保育園における食育活動の有効性に関する文献レビュー, 北海道教育大学紀要(教育科学編) 第72巻 第1号
- 6) 辻村明子, 久保薫 (2015): 保育所・幼稚園における食育実践に関する系統的レビュー, 青森中央短期大学研究紀要 28, 85-92
- 7) 幼稚園教育要領解説<平成30年2月> 文部科学省, 2018
- 8) 保育所保育指針解説<平成30年3月> 厚生労働省, 2018
- 9) 斎藤祐子, 奥山優佳, 大沼弥生他 (2022): 保育所における食育実践と保護者の食意識—子育て支援の視点より—, 東北文教大学・東北文教大学短期大学部教育研究 第12号, 91-105
- 10) 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析〔第2版〕—内容分析の継承と発展を目指して—, ナカニシヤ出版, 2020
- 11) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～(概要) (2004)
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/06/dl/s0604-2k.pdf> (最終アクセス2022年11月27日)
- 12) 上杉幸世・稲葉理恵子 (2013): 保育所における食育活動の現状と栄養士の関わり, 大妻女子大学家政系研究紀要 第49号, 55-62
- 13) 石見百江・吉澤和子 (2016): 保育所での食教育実践が保護者の意識や家庭に及ぼす影響について, 長崎県立大学看護栄養部紀要 第15巻, 67-72
- 14) 新型コロナウイルス感染症対策マニュアル 第2版改訂版(保育所・認定こども園・幼稚園・届出保育施設等・放課後児童クラブ用), 山形県しあわせ子育て応援部子ども保育支援課, 2022
https://www.pref.yamagata.jp/documents/23470/corona_manual_2-1.pdf
(最終アクセス2022年11月30日)
- 15) 「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」の変更等について, 文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課, 2022
https://www.mext.go.jp/content/20221129-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf
(最終アクセス2023年1月16日)